

伊藤和夫の「受験英語」教育における「教養主義」： 「構文主義」との関係から

Self-Cultivationism in Kazuo Ito's English Teaching for University Entrance
Examinations

藤 村 達 也
(FUJIMURA, Tatsuya)

日本英語教育史学会

『日本英語教育史研究』第34号抜刷

2019年 5 月

伊藤和夫の「受験英語」教育における「教養主義」： 「構文主義」との関係から

Self-Cultivationism in Kazuo Ito's English Teaching for University Entrance
Examinations

藤 村 達 也
(FUJIMURA, Tatsuya)

キーワード： 伊藤和夫 教養主義 受験英語

Abstract

This study attempts to identify the nature of *Kyoyo-shugi* (self-cultivationism) in the English teaching for university entrance examinations by Kazuo Ito, an English teacher at Sundai Preparatory School. This paper first describes his methodology for reading English, so-called *Kobun-shugi*. It emphasized the distinction between reading English and translating it into Japanese. Then, the characteristics of his *Kyoyo-shugi* are discussed in relation to *Kobun-shugi*. He attached great importance to *Kyoyo-shugi*, but didn't express it in teaching English for entrance examinations. This paper concludes that Ito utilized *Kobun-shugi* to enable students to read English so as to pass university entrance examinations, and that at the same time he aimed to embody cultural values of *Kyoyo-shugi* through *Kobun-shugi*. Thus, his *Kyoyo-shugi* was based on *Kobun-shugi*.

1. はじめに

明治期以来、「受験英語」は日本の英語教育において大きな位置を占めてきた。「受

験英語」では会話を中心とした「実用」的スキルが身につかない、といった批判も根強く存在するものの、明治中期に学術研究および高等教育を日本語で行うことができるようになってから現在に至るまで、多くの日本人にとって英語学習の最大の目的は上級学校への進学であり、「受験英語」が日本の英語教育に与えてきた影響は大きい(江利川, 2011)。

しかしながら、これまでの英語教育史研究において、「受験英語」に十分に光が当てられてきたとは言いがたい。わずかながらも存在する「受験英語」を対象とした研究に、速水と男による一連の論文(速水, 1986; 速水, 1987; 速水, 1989; 速水, 1990; 速水, 1993)がある。速水は、「方法論と英文法」、「英作文」、「英単語」、「英文解釈」に対象を区分し、それぞれの領域における学習参考書を取り上げ、特徴を分析している。速水は、参考書が「教科書と並んでその系譜を調べることは英語教育史の重要な一部となるにもかかわらず、ほとんど手がつけられていないのが実情である」と指摘する(速水1986, p. 57)。また、「受験英語」を対象とする最も包括的な研究としては、江利川(2011)が挙げられる。江利川もまた、速水と同様の問題意識を持ち、学習参考書や入試問題を対象として明治期から現代に至るまでの「受験英語」の特徴と変遷を描いている。

これらの研究では「受験英語」の主要な要素の一つである学習参考書において、どのような英語力を身につけるために、いかなる工夫が指導者によってなされてきたのかが明らかにされている。しかしその一方で、そうした指導者たちがいかなる教育観を持ち、何を英語教育の目的に据えていたのかについては十分に明らかにされているとはいえない。英語教育史研究において、英語教育の目的論、とくに「実用」と「教養」の対立をめぐる議論は主要なテーマの一つである(竹中, 1982; 寺沢, 2014など)が、そうした観点は「受験英語」研究において取り入れられてこなかったといつてよい。その理由は、「受験英語」が「入学試験に出題される英語であり、学習者から見れば出題される英語問題を効率よく解くための学習法、教師から見ればその指導法」(江利川, 2011, p. iii)として定義できることから、そもそも「受験英語」の目的が入試合格であることは明らかであるためでもあると考えられる。

しかし、「受験英語」の指導者の中には、単なる試験対策ではなく、その先により

大きな教育的目的を求めた者もいた。そうした指導者の一人として、本稿で対象とする伊藤和夫の名前を挙げることができる。伊藤和夫（1927-1997）は、駿台予備学校（以下、駿台と略記）の英語科講師として『英文解釈教室』（1977）や『ビジュアル英文解釈』（1987, 1988）など数多くのベストセラー参考書を執筆し、「書いた原稿1万ページ、売れた本1000万冊、教え子100万人」（秋山、1997, p. 16）と言われるほどの影響力を持ち、「受験英語の神様」と呼ばれた。

これまで伊藤が論じられる際には、その独自の英文解釈法である「構文主義」¹⁾が主な対象であった（入不二、1995；入不二、1997；江利川 2011）。本稿は、この「構文主義」との関連のもとで、伊藤の「受験英語」指導における目的論の特徴を「教養主義」の観点から明らかにし、「受験英語」が、入試対策を超えていかなる価値へと接続される可能性を持ちえたのかを検討するものである²⁾。

2. 研究方法

伊藤の「受験英語」指導における「教養主義」を検討するにあたって、英語教育における「教養主義」の定義を確認しておく必要がある。なお、一般に学生文化としての「教養主義」とは、哲学・歴史・文学などの人文学を中心とした読書を通じ、人格を陶冶することを目指す態度を指す（竹内、2003など）。それに対し、英語教育における「教養主義」は、英語教育の目的における理念を指すものであり、これらは重なり合いつつも異なる概念であることに注意しておきたい。

寺沢（2014）による整理をもとに、英語教育における「教養主義」の特徴を確認しておこう。英語教育の文脈における「教養」をめぐるのは、「教養」対「実用」の価値に関する議論が明治初期から続いている。その中でも特に有名なのが、岡倉由三郎『英語教育』（1911）における主張である。岡倉は、旧制中学校の英語科は「教育的価値」と「実用的価値」という二つの価値を備えていなければならないという（岡倉、1911）。「教育的価値」とは、(1) 英語教材の「内容」から、文化の相対性など柔軟な思考を得ること、および(2) 母語と異なる言語体系に触れることで、言語の相対性や思考力を育むことであり、対する「実用的価値」とは、英語を通して「欧米の新鮮

にして健全な思想の潮流」(岡倉, 1911)を学ぶことであるという。しかし、現代では「実用」というとSpeakingやWritingなどの産出能力を中心とした英語の運用能力を指すことが多く、このような「実用」の用法は一般的ではない。そのため、寺沢は川澄(1979)にならい、岡倉の「教育的価値」と「実用的価値」を総合したものを「文化教養説」と呼び英語教育における「教養主義」として扱っている(寺沢, 2014)。

以下では、伊藤の「受験英語」指導における方法論と目的論、そしてそれらの関係を分析していく。3節では、伊藤独自の英文解釈法である「構文主義」の特徴を検討する。続く4節では、伊藤の英語教育観を分析し、その「教養主義」的志向を「構文主義」との関連から明らかにする。また、その志向の背景について、伊藤と親しい関係にあった元予備校講師からの聞き取りを活用して述べる。

3. 伊藤和夫の方法論—「構文主義」

伊藤和夫は1927年に長野県に生まれ、旧制東京府立第五中学校、第一高等学校を経て、1947年に東京大学文学部哲学科に入学した。1953年に東京大学を卒業した後、横浜の山手英学院で英語講師の職に就いた。その後、1966年に駿台予備学校(当時は駿台高等予備校)に移籍した。

伊藤は1979年に駿台英語科の主任講師となり、様々な制度改革を行うことで、カリキュラムや指導方針について主任講師が一元的に指示をする、自身を頂点とする英語科の体制を強固なものにしていった(高橋, 1997)。主任となる以前から、英語科のテキストの大半を伊藤が執筆し(富田, 1997)、またそのテキストほぼ全てに自著への参照ページが付される(伊藤, 1997)など、駿台内において多大な影響力を発揮し、自らの英語教育観を駿台における英語指導に反映させていった。

学習参考書も数多く執筆し、ベストセラーも多数出ている。とくに、「構文主義」の視点から新たな英文解釈法を打ち出した『英文解釈教室』(1977)や、『ビジュアル英文解釈』(1987, 1988)は数多くの受験生に使用された。また、これらの著作を通じて、伊藤独自の指導法は駿台外の英語講師にも大きな影響を与えたという(高橋,

1997；入不二，1995）。

こうして伊藤が大きな影響力を持ち、「受験英語の神様」と呼ばれるまでに至った最も大きな理由に、伊藤による独自の英文解釈法である「構文主義」の存在がある。本節では、この「構文主義」がどのような特徴を持つものであったのかを検討する。

3. 1 「読む」ための方法論

元駿台英語科講師で哲学者の入不二基義は、伊藤による英文解釈法の特徴が「英文の骨組みは、煎じ詰めればどのような見取り図になるのか」という「構造」の意識化と、「英文に沿って左から右へと流れていく『頭の働き方』は、どのようなものか」という「流れ」の意識化にあるという（入不二，1995，p. 2）。1964年に出版された処女作である『新英文解釈体系』の「序文」において、伊藤は以下のように述べる。

英文解釈の参考書は、英文法の書物とちがって、英文に向かう態度が読み進むに従い自然と養われるように組織されていることが必要である。事項の雑然たる羅列でなく、参考書の組織それ自体が英文読解の際の頭の働^マらかせ方^マに対応していなければならない。本書は、このため、できるだけ少数の原理から出発し、全体を有機的に構成することによって、複雑な英文を読み解く態度がおのずから養われるようにした。（伊藤，1964，p. ii - iii）

伊藤は、文法に依拠しつつも、英文解釈の参考書にはそれと異なる原理に基づく編成が必要であると考えた。伊藤は同書において、あらゆる英文の「構造」が「S+V+……という文の基本構造と、HとMという関係——わずか2つの原理——の複雑な組み合わせにすぎない」と述べる（伊藤，1964，p. 3）。S+V+……とは、「『主語と述語動詞』とその後ろの『目的語や補語』の作り出す秩序の枠組み」を表したものであり、H+Mとは被修飾語と修飾語の関係である（入不二，1995，p. 4）。伊藤は英文を「訳す」のではなく「読む」ための方法論の必要性を感じていた。S+V+……という枠組みで英文の構造を説明することで、あらゆる文を基本文型とその拡張として捉え、文法の参考書では異なる章に配置される不定詞、分詞、動名詞、接続詞、疑問詞とい

った様々な要素をその中に取り込んでいった。また同様に、H+Mという枠組みによって、『英文解釈体系』では不定詞、分詞、前置詞、関係詞といった品詞による分類を越境し「形容詞的修飾語」として解説するなど、この二つの原理によって一貫した説明が可能になっている。品詞論による分類を目的とした学校文法を超えて、「読む」際の思考に適した文法を生み出そうとしたのである。

「構文主義」のもう一つの特徴が、「流れ」の意識化である。伊藤は以下のようにいう。

英文を訳すのではなく読んでいる時は、我々の目は常に英文の流れに沿って、左から右へ、上から下へ動くのが理想なのだ。どんな複雑な英文でも、一番はじめの大文字から読みはじめて、読むに従ってわかり、文末のピリオドに到達した時には一度読んだだけですべてが終わっているような読み方が正しい読み方である。それには読みはじめた時から、文の構造についてある予想を立て、文が形の上で自分の予想通りに進行してゆくか、予想を裏切った展開になるかを確認してゆく作業が大切だ。(伊藤, 1997, p. 188-189)

これに関して、たとえば不定詞について『英文解釈教室』に以下のような解説がある。To master English... と始まった英文に対し、To master English is not easy. のように続く場合と、To master English you must work hard. と続く場合が考えられる。To master English の部分は、前者の場合には名詞句となり、後者では副詞句となる。したがって、to 不定詞から始まる英文を読む際には、「(1) to 不定詞が主語か、副詞的用法か予想をたて、(2) to 不定詞に続く部分が予想どおりであればそのまま進み、予想外の形が出てくれば前にもどって解釈を変える」という形で頭を働かせるのだと伊藤は解説する(伊藤, 1977, p. 10-11)。これを入不二は「予測とその確認」と呼び、『英文解釈教室』を「他の参考書群から明確に区別している特徴」とであるという(入不二, 1995, p. 4)。

伊藤は「英語を読む際に具体的には頭はどう働くのか、また働くべきなのかを解明」し、「『英語→事柄→日本語』という図式での思考法を確立する」ことを目指した

(伊藤, 1977, p. vii)。英文を読む際の思考方法に適した独自の体系をもとに、日本語を介在させずに英語を「直読直解」(伊藤, 1977, p. vi)するための方法論を生み出そうとしたのだといえる。

3. 2 「訳す」ことの意義

伊藤の「構文主義」は、日本語を介在させずに英文を「直読直解」することを目指すものであった。だが一方で、伊藤は英語学習から和訳を排除しようとしていたわけではなく、積極的な役割をも見出していたのである。伊藤は、英文の意味を正しく理解できるようになるには、その構造を意識的に学習する必要があるといい、そのために不可欠な手段として、文法に加え「母国語の介在による各段階での意味の確認」を挙げている(伊藤, 1997, p. 87)。伊藤は基本的な表現に関しては逐語的な言い換えや文法的な分析を学習者に求めることの弊害を認めた上で、抽象的な内容については、母語による言い換えにより「理解内容を鏡に映して確認することが必要」になるというのである(伊藤, 1997, p. 87-88)。

英語の中だけで行なわれる英語教育はRaise your hand.のレベルを離れると、理解の正誤を判定する手段を持たず、授業効果が測定できないこともある。(中略)母国語学習の場合は二十四時間英語漬けの状態にあり、わずかな誤解でも周囲の人々によって訂正されたり、現実から痛烈な反撃を受けたりする。いや、正しい理解に生存そのものがかかっているのである。しかし、English through Englishの形をとる教室英語にはその訂正の機会がない。(中略)。教室での学習を有効に進め、大学入試段階での学生の能力を点検しようとするれば、英文和訳や内容に関する記述式設問という形で日本語を参加させざるを得ない。日本語はこの場合、英語の理解度を映す鏡の役目をする。意識的なブラックボックスの構築には、鏡を避けては通れない。(伊藤, 1997, p. 88)

伊藤は、英文を「読む」として「訳す」ことを峻別し、日本語を介さずに英文の内容を「直読直解」することこそが「読む」としてあるとした。そして同時に、英語

を「訳す」ことで日本語をその「鏡」として対置し、その内容の理解を問う必要があると考えたのである。

4. 伊藤和夫の目的論——「教養主義」

前節では、伊藤和夫による英文解釈法である「構文主義」が、どのような英語力を学習者に獲得させようとしたものであったのかを分析した。伊藤の名を知らしめたこの方法論が、大学入試で合格することを目的とした「受験テクニック」としての側面を持っていたことは間違いなく、多くの受験生から実際にそのように受け取られていただろう。しかし、伊藤の「構文主義」は入試合格だけを目的とした単なる「受験テクニック」ではなく、その先に「教養主義」的な価値へと接続される可能性を持っていたのである。本節では、「教養主義」の観点から伊藤の「受験英語」における目的論を検討する。

4. 1 「禁欲」された「教養主義」

伊藤と同時代に駿台で同じく人気を博していた英語講師に、奥井潔（1924-2000）がいた。奥井は英文学を専門として大学で教授職に就く一方で、駿台でも英語を指導していた。奥井はきわめて教養主義的な人物であった。「私にとっては、いわゆる『受験英語』なるものは存在しません」（奥井，1997）といい、予備校においても非常に教養主義的な授業を行っていた。「サマセット・モーム，T.S.エリオット，グレアム・グリーンなどの小説や評論を教材として，受験英語は一切無視して，文学・人生を語り，旧制高等学校の授業とは斯の如きものか，と言われて」（齋藤，2015a）いたという。奥井は大学合格を目指す予備校という場にながら，自らの「教養主義」的な価値観を直接的に反映させた授業を行っていたといえる。

この奥井と比べるならば，伊藤は一見すると入試合格を目的とする実利的な「受験英語」教育のみを行っていたようにも見える。「入学試験のための英語はわかるかもしれないが，それは書き言葉や話し言葉の英語とは全く違うものだ」と批判された際には「その通り，自分はいかに試験に通るかを教えているので，それは英語とは何の

関係もない」(ミヨシ, 2007, p. 32)と答えたというし、「人生を語ることなど私にはできない。だからそういうことはしないのだ」「英語の教師は学生に英語力をつけるのが仕事であり、英語を語るのが仕事だ」(高橋, 1997, p. 7)とも言っていたという。

受験生に対する助言においても、受験生がペーパーバックや英字新聞、英書を読んで英語を学ぶことや、受験勉強のためにモームやラッセルなどによる文章を読むことの必要性については否定的な態度を取っており、難関大学であっても予備校のテキストだけで合格する人も多いと述べている(伊藤, 1986)。また、基礎学力を養うことの重要性は強調しつつも、各大学に特有な出題の形式があればそれに対応する考え方があるといい(伊藤, 1986)、問題本文を読まずに選択肢のみを読んで解くような方法も必ずしも否定してはいない(伊藤, 1995)。

こうした実利的な伊藤の姿勢は、テキストや参考書を通じて駿台英語科にも大きな影響を与えた。伊藤が主任講師であった当時、英語科のテキストの大半を伊藤が執筆し、それらは「構文主義」に徹するものであり、『『教養主義』・『人文主義』をまるで『禁欲』したような様相を呈して』いたという(齋藤, 2015b, p. 3)。また、英語科主任の座を伊藤から継いだ高橋善昭は、優れた英語教師には、英文の内容解説を構造解説に優先させるタイプとその逆のタイプの二類型が存在すると述べる。前者には膨大な背景知識、豊かな教養と優れた人間性が、後者には実践的かつ体系的な方法論が要求されるという。奥井は前者の代表格であったが、伊藤は後者のタイプを目指す英語教師に対して強力な方法論を提示することになったというのである(高橋, 1997)。このことから、伊藤の「構文主義」や実利的な受験指導が、奥井に代表される「教養主義」的な英語指導と対立するものとして認識され、講師にも広く影響を与えていたことが見てとれる。

4. 2 原書を通した思考力の養成

しかし、そうした伊藤自身の発言や周囲の認識に反して、伊藤の指導における目的論には「教養主義」的志向が様々な形で表れていた。先に引用した「教養主義」に対する「禁欲」とは、単に伊藤の「構文主義」偏重の指導を批判しているに過ぎないと考えられるが、実際のところ、伊藤は「教養主義」についてまさしく「禁欲」という

べき態度を取っていたのである。

先述したように、英語教育における「教養主義」は、英文学などの「高尚な」内容の英文を読み解くことでその内容を理解し思考力を養うことを目指すという点で、原書での読書に価値を置く。これに関していえば、伊藤は受験勉強を終えた後に原書での読書をすることの重要性を強調していた。伊藤は『英文解釈教室』の「あとがき」において、同書を読み終えた学習者に対し、「この書物から得た知識をもとに、原書を読む道、自分が読みたいとかねがね思っていた本を読む道へ踏み出す」（伊藤、1977, p. 301）ことを勧めている。また、かつての受講生によれば、受験生に対して、「ほんとうの意味で大人の英語を読めるようになるには、積み重ねたときに君たちの身長と同じ高さになるぐらいの原書や英語雑誌を読まなければならない。ただし、それは大学生や社会人になってからやるべきことであって、受験生時代には必要ない。受験用テキストの勉強によってそういった英語を読む下地を作るだけでじゅうぶん」と述べていたという（越前、2009, p. 74）。また、受験生に向けて、「原書で読めば、かならず翻訳では得られなかった何かが得られる。そうでなければ、僕らが苦勞して語学をやることの意味はないんだものね」とも語っている（伊藤、1986, p. 122）。入試直前期に行われた特別授業においても、大学入学後に英語のペーパーバックを読むことを勧め、書籍の選び方や読み方について助言をしていたという（河合、2013）。「受験英語」、とくに「構文主義」を通じて英文の読み方を学び、その後に原書での読書へと進むことが期待されていたといえよう。

さらには受験勉強を終えた後のみならず、その内部においても原書での読書との接続が意識されていた。『英文解釈教室』の5年後に執筆された『英語 長文読解教室』は、『英文解釈教室』を終えた学習者が「同書と原書の間にもう一冊、同書で示した方法を基礎に長文に対する内容的読解の訓練をする書物」（伊藤、1983, p. iii）であるという。入試問題は「学生が『原書』の一步手前の段階で読む文章として好適なものが多い」といい、英文を内容のテーマで分類し、「同一事項に関し時に内容的に連続し、時に筆者を異にするため論旨が背反する文章をいくつか並置することによって学生の知的好奇心を刺激し、それが英文に対する内容的思考への原動力となることを期待している」（伊藤、1983, p. iii-iv）と述べる。また、「ただ最初は軽い気持で読

み出した人も、いつか英語を考えながらじっくり読むことの面白さに目ざめてもらえればというのが筆者の願いである」（伊藤，1983，p. v）という。同書の続編である『テーマ別 英文読解教室』（1994）も同様の目的で執筆されており、「大学生や社会人で英語を『読む』ことへの興味を持ち続けている人にも好個の読み物になる」という（伊藤，1994，p. iii-iv）。受験勉強においても原書に準ずる水準の英文を読み解くことで、英文を読むことの面白さに気づき、内容を理解して思考を深めることを期待していたといえよう。

受験生が入試合格のために原書での読書を行う必要性については否定的であった伊藤がこのように言うのは、「構文主義」により英文の構造を理解し日本語を介在させずに「直読直解」できるようになることと、英文の内容を理解し思考力を養う「教養主義」の間に、順序が想定されていたからであると考えられる。『英文解釈教室』の「あとがき」には以下のように記されている。

英語の力は理解が半分、習練による慣れが半分である。英語を読むことによってのみ英語は読めるようになる。読書にあたって、われわれはたえず形式と内容の両面から考えているはずであるが、本書の内部に在るかぎり、常に形式面の考慮が優先していた。しかし、数多くの書物を読み、多くの英文にふれて英語に慣れることによって、形式に対する配慮はしだいに意識の底に沈んでゆく。やがては、形式上特に難解な文章にぶつからぬかぎり内容だけを考えていればよくなる。その時、つまり、本書の説く思考法が諸君の無意識の世界に完全に沈み、諸君が本書のことを忘れ去ることができたとき、「直読直解」の理想は達成されたのであり、本書は諸君のための役割を果たし終えたこととなるであろう。（伊藤，1977，p. 301-302）

最初は英文の構造、すなわち形式面に重点を置き、英文の読み方を学ぶ。そうした理解の段階が終われば、英文の内容に重点を移し、多くの英文に触れて「慣れ」ていく必要がある。「構文主義」により読解の方法論を学んだ後は、原書、あるいはそれに準ずるレベルの入試問題を数多く読むことで、「構文主義」による思考法が「無意識の世界に完全に沈み」、「直読直解」が達成されるのである。このような意味で、

「直読直解」を目指す「構文主義」は、「教養主義」的な目的論に接続されうるものであった。

4. 3 「訳す」ことを通じた言語能力の涵養

一方で、「構文主義」においては「訳す」ことに「和訳を通じて英語の理解を確認する」という役割が与えられていた。この「訳す」という行為は、「教養主義」との関係においていかなる意味を持つのだろうか。

英文和訳には「最近全く看過されている建設的な面」がある、と伊藤はいう（伊藤，1997，p. 89）。It will rain, for the barometer is falling.という英文を「雨が降っているのは、晴雨計が下がっているからだ」と訳す生徒や，In winter and spring, our jam is very useful.という英文において「うちのジャムはとても必要・重要だ」と誤訳する生徒が存在することを示し，問題は英語力ではなく，「原因」と「結果」という因果関係に関する認識や，「有用」「必要」「重要」といった言葉を区別する日本語の能力の不足にあると指摘する（伊藤，1997）。こうした論理や概念を理解できているか否かが，「大学教育の適性を測るにあたって何より先に問われなければならぬものであり，それは海外旅行にあたって当面の応答が不自由なくできるかどうかなどということより，はるかに本質的な問題」であるというのである（伊藤，1997，p. 91）。伊藤は以下のように続ける。

国語についての自覚を深め，その能力の向上をはかるためには，国語以外のコトバの学習が必要である。（中略）必要なのは自分の姿を写し出す鏡である。英語学習に際して，ある段階から先では日本語という鏡が必要であったように，国語の学習のためにも，ブラックボックスの存在に気づかせるための「外国語」という鏡が必要なのである。（中略）英語だけが，当面の必要を満たせるかどうかという低次の効果だけを云々され，日本語を中心とする言語能力の涵養という基本は忘れられていてよいものだろうか。日本語と英語という二つの言語から等距離のところを身を置き，二つの鏡を映しあわせることによって，個々の言葉を離れた抽象的な思考領域と「物自体」の存在に気づかせることが，語学教育の第一の意味であるべきだ

と筆者は考える。(伊藤, 1997, p. 92-93)

前章で見たように、伊藤は、日本語を「鏡」として対置することで、英語の理解度を測るという役割を「訳す」ことに与えていた。ここで述べられているのは、逆に英語を「鏡」として日本語、そしてさらには言語そのものに関する能力を涵養するという目的である。すでに確認したように、このようにして英語教育の目的を、母語を含めた普遍的な言語能力や抽象的な思考力の養成に置く考え方は、英語教育における「教養主義」の系譜に連なるものである。

伊藤は、受験指導の場で文学や哲学、人生論を語るような「教養主義」に対しては「禁欲」的な態度を取った。しかし、「構文主義」による「受験英語」の学習を終えた先に、あるいは「受験英語」的な英語学習を通して、「教養主義」的な目的を達成することを期待していたという意味で、「禁欲」されながらも明確な「教養主義」的志向を持っていたといえる。

4. 4 「禁欲」の背景

だが、伊藤はなぜ「教養主義」を「禁欲」する必要があったのだろうか。伊藤は旧制中学、旧制第一高等学校を経て東京大学文学部に入学した。これは「教養主義」的志向を持つ者としては典型的な経路であるといえる(竹内, 2003)。旧制高校時代には、フランス文学やロシア文学の英訳書を読み、「英語会」というサークルで英書の多読競争を行うなどして英語力を向上させた(伊藤, 1997; ミヨシ, 2007)。常に学年で一、二を争うほど成績が優秀だった伊藤は、当時から英語、ドイツ語、フランス語が堪能であり、カントの著作をドイツ語で、フローベールなどフランス作家の作品をフランス語で読んでいたという(ミヨシ, 2007)。伊藤は周囲の人間からも深い教養を持った人物として捉えられており、同僚であった高橋善昭によれば、先に述べたように伊藤自身は「人生を語ることはしない」といいながらも、「実際は大学で専攻した哲学を含め、語るべきものを多く持った教養人でもあった」(高橋, 1997, p. 7)という。

この伊藤が「教養主義」に対し積極的な態度を取るどころか、前述のように「禁

欲」的態度を取っていたということは、少なくとも自然なことであるとはいえない。説明が必要であろう。じじつ、前述の奥井のように旧制高校から東京大学文学部という類似した経歴を持ち、予備校という場でありながら「教養主義」的な授業を行っていた講師もいたのである。この問題に関しては本人による証言が確認できないため、関係者による回想という形ではあるが、分析を加えておきたい。

かつて駿台で英語講師を務め、伊藤と接する機会も多かったという入不二基義は、伊藤の「禁欲」について以下のように述べている。

自分が青年期におじさんの哲学へののめり込みに影響を受けてしまったために、自分は実は誤った選択をしたのだという思いが、実はその禁欲の動機なんです。これは伊藤先生自身が語っていたことなので、まさにそのままです。予備校生の年代というのは、そういう迷う時期なので迷わせてはいけない、誤った選択をさせてはいけないのだったというのが、実は伊藤和夫のモットーになっていた。これは何度も語っていましたね。それは自分のことを言っているわけですよ。(中略) 予備校で哲学を語ることが、感動を呼ぶ反面、あるいはそれによって学生たちの何かを鼓舞するっていう側面以上に、誤った進路を呼び起こすということのマイナスを自分は避けたいと、結構強く言っていましたね。もちろん語るべきことはあるし、語りたっていう欲求だっていくらでもあると思う。だけどそれは、語ってはいけないのだと。少なくとも、自分はそれをしないと。ということは固く言っていましたね。(入不二、著者によるインタビュー、東京、2017年8月8日)

伊藤は、おじから青年期に影響を受けて哲学の道を志した。しかし、後になって自らの適性を省み、その進路選択が誤りであったと考えたという。自身の体験から、予備校で受験生に対して受験勉強を超えて何かを語ることが、受験生の進路に不適切な影響を与えることを危惧していたのである。

また、予備校では、講師の待遇は主に生徒による授業アンケートの結果に大きく左右される(丹羽、2004)。そのため、講師は様々な手段を使用して自らを他の講師から差異化し、受講生からの支持を勝ち取らなければならない。だが、受験生からの人

氣を得るための方法は、受験に必要な知識や技術を分かりやすく体系化して教えることだけではない。伊藤自身がいうように、「彼らは人生論に飢えている世代であるから、人生論でも、それがあいまいな人生所感やフヤけた人生談義でなく、教師の人格と生活によって裏打ちされていれば、学生を引きつけることは可能である」（伊藤，1997，p. 216-217）し、チャイナ服を着て教壇に立つ講師（伊藤，1997）や「歌ったり飲んだり踊ったりして学生の人気を獲得」（伊藤・大島・入不二，1991，p. 56）しようとする講師も現れる。しかし、そうした様々な差異化の戦略について、入不二が「結局同じ学生の前で繰り広げられている『劇』なわけです。水平レベルの差異づけであって、いかなる発言をしても学生という観客の前で語る限りその平面を超越することはできません」（伊藤・大島・入不二，1991，p. 56）と語るように、予備校では「歌ったり飲んだり踊ったり」すること、学問や人生について語ること、英文の読解法を教えること、自分の指導法の優れた点を誇示すること、あえてシニカルな態度を取って予備校という場を否定してみせることなど、こうした全てが同様に受講生の人気を獲得するためのパフォーマンスとしての性格を持ち、授業自体が商品となるのである。そして、この空間において哲学や人生論を受講生に向けて語ることの（無）意味を、伊藤は理解していた。

そういう予備校の場で学生を、学生の気持ちを鼓舞するために、あるいは学生に対して自己主張するために語られるような哲学の話っていうのが、いかにちゃちなものであるかということを、彼は知っているんですよ。単なるそれは雑談にすぎない、ということを彼はよく、具体的な人物名も挙げながら言っていた。そういうちゃちな話を自分はしたくない、哲学の話をするのだったらちゃんと哲学の話をしたいと。それを、予備校のしかも英語の授業の中でするっていうことは、ちゃちな話にしかないえない、だから自分はしないと。それはあくまで哲学まがいのものにしかないし、その哲学まがいのものを哲学であるかのように思わせてしまうっていう誤りも引き起こす、ということも常々言っていて。だから自分は哲学を語ったりはしない、ということはかなり強く言っていましたね。（入不二，著者によるインタビュー，東京，2017年8月8日）

伊藤は、「教養」の価値を軽視していたのではない。受験指導の場においてそれを求めることの限界を理解し、「受験英語」の先に、あるいは「受験英語」の深層にそうした目的を埋め込むことで、あくまで入試合格を目指す「受験英語」の指導に徹しながらも、その「受験英語」が「教養主義」的な価値へと接続される可能性を残したのである。

5. おわりに

本稿では、予備校講師・伊藤和夫による英文解釈法である「構文主義」の特徴を分析し、それと関連づけて伊藤の「受験英語」指導における「教養主義」的志向の存在およびその特徴を明らかにした。また、伊藤がそうした「教養主義」的志向を「禁欲」した背景を、関係者の証言および予備校という場の特徴を検討することで示した。本稿の分析により、伊藤による「受験英語」指導が、大学入試合格を目標とした「受験テクニック」であっただけでなく、「教養主義」的な価値と接続されうものでもあったことが明らかになった。

しかしながら、伊藤和夫をめぐる研究にはさらなる課題が残されている。まず、伊藤の「構文主義」について、参考書の構成などを含めた詳細な分析や、時期による伊藤自身の教育観の変化に焦点を当てた通時的な分析が必要である。また、伊藤がなぜ「受験英語の神様」となりえたのか、という問いに答えるためには、伊藤の指導が優れていたことを指摘するだけでは十分でない。予備校の社会的位置の変化や大学進学率の上昇といった社会的文脈を踏まえた分析も必要となるだろう。今後の課題としてい。

注

- 1) 英語教育において、「構文」という言葉は多義的である。谷・西村（2006）は、「受験英語」における「構文」の系譜を追う上で、「『構文』とは、内容語を中心とする単なる熟語というよりは、多くは機能語を含んでいるが故に日本人が理解しにくい、熟語ないし熟語もど

きの相関語句や語のsequenceであると、暫定的に定義しておく。ただし、時代が下るにつれて、『構文』という名のもとに、統語的な項目、特に動詞型に関連する項目が包含される傾向にあることは明かである」と定義、言及している。これに従うと、①「構文」には、so...that...やwhat you callなどの「熟語」「公式」を意味する場合と、②英文の主に動詞を中心とした「構造」を意味する場合がある。谷・西村は伊藤（1997）がwhat you call...「いわゆる...」といった「公式」を中心とする英文解釈法を批判していることを挙げ、伊藤が『『構文』主義の英文解釈法を批判』していると述べている。しかし、伊藤自身は「構文主義」という用語を用いていないものの、一般には伊藤固有の英文解釈の方法論を指して「構文主義」と呼ばれることが多く（表1991、今井1999など）、その際は前述の②の意味に分類されることになる。

- 2）本稿は、日本英語教育史学会第34回全国大会（2018年5月20日）における口頭発表を、表題も含めて全体的に書き改めたものである。

参考文献

- 秋山仁（1997）．「君と僕とはランタン相照らす仲」『現代英語教育』1997年5月号，16-17．
- 越前敏弥（2009）．『越前敏弥の 日本人なら必ず誤訳する英文 あなたはこれをどう訳しますか？』ディスカヴァー・トゥエンティワン．
- 江利川春雄（2011）．『受験英語と日本人——入試問題と参考書からみる英語学習史』研究社．
- 速水和男（1986）．「英語学習参考書の研究——方法論と英文法参考書の系譜——」『日本英語教育史研究』1，57-81．
- 速水和男（1987）．「英語学習参考書の研究——英作文参考書の系譜——」『日本英語教育史研究』2，187-206．
- 速水和男（1989）．「英語学習参考書の研究——英単語参考書の系譜——」『日本英語教育史研究』4，181-206．
- 速水和男（1990）．「英語学習参考書の研究——英文解釈参考書の系譜（1）——小野圭次郎——」『日本英語教育史研究』5，159-181．
- 速水和男（1993）．「英語学習参考書の研究——英文解釈参考書の系譜（2）——」『日本英語教育史研究』8，161-179．
- 今井宏（1999）．『今井の英文読解 パラグラフリーディング（I）スーパー速読編』代々木ライブラリー．
- 入不二基義（1995）．「『英文解釈教室』というマイクロコスモス——伊藤和夫著『英文解釈教室』を解釈する」『高校英語研究』1995年3月号，1-10．

- 入不二基義 (1997). 「二つの頂点——『英文解釈教室』と『ビジュアル英文解釈』」『現代英語教育』 1997年5月号, 12-17.
- 伊藤和夫 (1964). 『新英文解釈体系』 有隣堂.
- 伊藤和夫 (1977). 『英文解釈教室』 研究社.
- 伊藤和夫 (1983). 『英語 長文読解教室』 研究社.
- 伊藤和夫 (1986). 『大学入試 必ずワカル 英語の学習法』 駿台文庫.
- 伊藤和夫 (1987). 『ビジュアル英文解釈PART I』 駿台文庫.
- 伊藤和夫 (1988). 『ビジュアル英文解釈PART II』 駿台文庫.
- 伊藤和夫 (1994). 『テーマ別英文読解教室』 研究社.
- 伊藤和夫 (1995). 『入試総合問題演習 [上級編]』 駿台文庫.
- 伊藤和夫 (1997). 『予備校の英語』 研究社.
- 伊藤和夫・大島保彦・入不二基義 (1991). 「伊藤和夫のミクロコスモスを(読む)」『ASCENT』 1991年11月号, 54-56.
- 河合潤 (2013). 「大学入学前に期待したこと」 安達千李・新井翔太・大久保杏奈・竹内彩帆・萩原広道・柳田真弘 (編) 『ゆとり京大生の大学論』 ナカニシヤ出版, 18-22.
- 川澄哲夫 (1979). 「英語教育存廃論の系譜」『英語教育問題の変遷』 研究社, 91-136.
- ミヨシ, マサオ (2007). 『抵抗の場へ—あらゆる境界を越えるために マサオ・ミヨシ自らの語る』 洛北出版.
- 丹羽健夫 (2004). 『予備校が教育を救う』 文藝春秋社.
- 岡倉由三郎 (1911). 『英語教育』 博文館.
- 奥井潔 (1997). 『英文読解のナビゲーター』 研究社.
- 表三郎 (1991). 『スーパー英文読解法 上』 論創社.
- 斎藤雅久 (2015a). 『かつて『チョイス』という名の英語教材があった』 游学社.
- 斎藤雅久 (2015b). 『続・かつて『チョイス』という名の英語教材があった』 游学社.
- 高橋善昭 (1997). 「伊藤和夫氏の業績」『現代英語教育』 1997年5月号, 研究社, 6-8.
- 竹中龍範 (1982). 「英語教育・英語学習における目的意識の変遷について」『英学史研究』 15, 171-184.
- 竹内洋 (2003). 『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』 中央公論新社.
- 谷明信・西村公正 (2006). 「いわゆる受験英語『構文』・『公式』の系譜——『難問分類英文詳解』と『新々英文解釈研究』(9訂版)の『構文』比較——」『実技教育研究』 20, 19-26.
- 寺沢拓敬 (2014). 「『なんで英語やるの?』の戦後史——『国民教育』としての英語, その伝統の成立過程』 研究社.
- 富田豊 (1997). 「予備校教師・伊藤和夫」『現代英語教育』 1997年5月号, 18-19.